様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３６３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：２４６１７０２５

研究課題名（和文）アメリカにおける移民音楽の相互作用、東欧・南欧・（旧）オスマン帝国出身者を中心に

研究課題名（英文）Musical Interactions among U.S. Immigrants, with a Focus on Immigrants from Eastern, Southen Europe and the Ottoman Empire

研究代表者
黒田　晴之（KURODA, Haruyuki）

松山大学・経済学部・教授

研究者番号：８０３２０１０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：ギリシア音楽のレベーティコにはオスマンや南スラヴの要素がある。1913年にギリシアに併合されたテッサロニキでは、ギリシア人・ユダヤ人・ムスリムのあいだで、相互作用があったことを窺わせるような資料もあるが、ローザ・エスケナージなどユダヤ系歌手は、ラディーノ語による録音を残していない。
アメリカのギリシア人移民はしばしば、東欧ユダヤ人と音楽を共有していた。これは音楽家が異種間で積極的な活動をしたというより、民族横断的なレコード産業があったこと、ギリシア人とユダヤ人が両者とも、録音や公演のさいパートの欠員が生じると、音楽家を融通しあっていたことなど、必要に迫られる場合があったことに負うところが大きい。

研究成果の概要（英文）：Urban Greek music "Rembetiko" has Ottoman and Southern Slavic elements. Though some documents suggest the possibility of musical interactions among Greeks, Muslims and Jews in Thessaloniki, Sephardic Rembetiko singers, such as Roza Eskenazi, did not record songs in Ladino. After immigration into the United States, Greeks shared a common, though not large, repertoire of tunes with Ashkenazim. This is not because they collaborated on their own will beyond ethnic borders, but rather because record companies developed multinational marketing, and both sides exchanged musicians for concerts and recordings when needed.

研究分野：ユダヤ学

キーワード：クレズマー　東欧ユダヤ人(アシュケナージ)　セファルディー　レベーティコ　オスマン帝国　ギリシア音楽　アメリカ音楽　移民

１．研究開始当初の背景

(1)　これまで本研究代表者は主として、東欧ユダヤ人の音楽「クレズマー」(Klezmer)を、文化史の観点から研究してきた。これはその音楽を担ってきたユダヤ人の出身地(東欧)、さらには移民として渡ったアメリカの両面から、クレズマーを歴史的に記述することに重点があった。このクレズマー研究でももちろん、ユダヤ人とその周辺ないし移民先の文化について、相互作用(インターアクション)の解明は大きな課題だったが、十分に検討されたとは言えない状況にあり、当該の研究分野でも研究の蓄積は乏しかった。

(2)　これまでアメリカのポピュラー音楽研究が取り組んできた対象は、現在の主流ないしはそれに通じるジャンルに偏りがちだった。たとえば「ルーツ・ミュージック」と称される音楽からは、東欧・南欧・(旧)オスマン帝国出身者の音楽が排除され、こうした音楽は 1960 年代前後に浮上する契機もあったが、本格的な評価・研究は冷戦終結後まで見られなかった。

２．研究の目的

(1)　このような東欧・南欧・(旧)オスマン帝国の音楽を考察するにあたり、19 世紀終わりから第 1 次世界大戦前後までに、当該地域からアメリカに渡ってきた移民の音楽を、
1) 各民族グループの出身地・アメリカでの展開から、
2) 次いで各グループ間の相互作用(インターアクション)の観点から
検討する。

(2)　ある民族の文化が移住先の環境のなかでいかに変化し、この変化がその民族グループにどう影響したか・しなかったかを解明し、最終的には単体の民族文化には収まりきらない、民族横断的な文化交流の記述を模索することが本研究の目的である。移民が曝された移住先の文化への同化圧力と、出身地のローカルな記憶をとどめた文化を継承する努力とを、創造的なせめぎあいとして記述する基礎を提供したい。

３．研究の方法

(1)　資料の収集

20 世紀前半に欧米で録音された東欧・南欧・(旧)オスマン帝国関係の音楽資料をまず収集した。Spottswood, 1990 のディスコグラフィーなどをそのさい頼りにした。さらに 20 世紀前半に欧米で制作されたアメリカへの移民に関わる映画ソフト、ワールド・ミュージックのブーム以前に公刊された、当該地域およびアメリカ移民の音楽の研究書も収集した。20 世紀前半にアメリカ移民が関わった演劇の研究書、アメリカへの移民とその同化に関する研究書も併せて収集した。

(2)　国内外でのヒアリング

東欧音楽全般の研究者 Yale Strom 氏(サン・ディエゴ大学教授)、YIVO (ニューヨークのユダヤ学研究所)のアーカイヴィスト Chana Mlotek 氏(本研究期間中に逝去)と連絡を取った。本研究期間中に日本に招聘したイディッシュ劇場 Folksbiene (ニューヨーク)の総監督 Zalmen Mlotek 氏、新たに連絡を取ることができた近現代ギリシア史教授 Ioannis Zelepos 氏(ミュンヘン大学)、音楽民俗学者の Joshua D. Pilzer 氏(トロント大学)からも、貴重な知見と助言を得ることができた。国内でも多くの方と意見交換が出来たが、吉村貴之氏(早稲田大学のアルメニア史研究者)、横山真紀(真姫)氏(セファルディー音楽の歌手)、関口義人氏(ロマにかんする先駆的な著作がある研究者)、大熊ワタル氏(東欧をレパートリーの一部にしている音楽家)のお名前をとくに挙げておく。

(3)　これら以外に研究期間に催した企画としては、前述のようにイディッシュ劇場 Folksbiene (ニューヨーク)の総監督 Zalmen Mlotek 氏を招聘し、各協力大学および機関とのコンソーシアムのかたちで(計 5 会場)、一般市民および学生に向けて、「ホロコースト音楽」をめぐる講演・公演の場を設け、あるいはまた本務校でやはり一般公開した企画(計 2 回)があることを付記しておく。これらの詳細については後述の「ホームページ等」を参照。

４．研究成果

(1)　アメリカにおける移民音楽の相互作用を、東欧・南欧・(旧) オスマン帝国出身者の音楽から探るにあたり、ギリシアの音楽「レベーティコ」(Rembetiko)の理解にまずは努め、これを東欧ユダヤ人の音楽「クレズマー」との関係で精査した。

ただしレベーティコという音楽そのものには、オスマン帝国や南スラヴの要素も同時に見られ、この音楽をギリシアの音楽として認知していく、戦後から現代にいたる音楽言説の編成過程には、ギリシアのナショナリズムも働いていた(オスマン出身者による「スミルナ様式」にはとくにその性格が強い)。

(2)　たとえば 1913 年にギリシアに併合されたテッサロニキでは、ギリシア人・ユダヤ人・ムスリムが併合以前、たがいに作用していた痕跡も残されている。こうした可能性を窺わせる歴史的文書、共通のレパートリーがあったことを示す録音資料が、点数こそ少ないものの発掘されつつある。ギリシア語によるレベーティコの歌を、ユダヤ人がラディーノ語による別の歌詞にして、翻案した例も突き止めることができた。なるほどオスマンの音楽からの影響が圧倒的に大きいが、ギリシア人とユダヤ人が果たした役割については、解明すべき点がまだまだ残されている。これ

とは別にクレズマーとレベーティコのあいだには、若干だか楽曲レベルでの相互作用もあったとの指摘がある。

(3)　セファルディーのユダヤ人が、レベーティコと関わった音楽の例としては、ローザ・エスケナージ(Roza Eskenazi, 1890 年中頃～1980 年)、ダヴィッド・サルティエル(David Saltiel, 1931 年～)、サヴィーナ・ヤナトゥ(Savina Yannatou, 1959 年～、ヤナトゥ自身はユダヤ人ではない)の作品をそれぞれ検討した。

エスケナージには、スミルナ生まれのハズンだったアルガジ(Isaac Algazi, 1889 年～1950 年)が、影響を与えたとする信頼すべき説もあるが、ユダヤ人が迎合後のテッサロニキで、ラディーノ語による録音をした形跡については未確認である。エスケナージなどレベーティコで活躍したユダヤ人は、ラディーノ語による録音を残していない。

たしかにサルティエルは、戦間期のテッサロニキで、ユダヤ人がラディーノ語で作った歌を、発掘および録音してはいるものの、サルティルとヤナトゥの録音した作品が、当時のユダヤ人の音楽シーンを、正確に再現しているかどうかは不明である。(以上の成果についてはすでに論文を脱稿)

(4)　ギリシア人は移民としてアメリカに渡ったのち、東欧ユダヤ人と音楽を共有したことを示す資料が、これも数は少ないとはいえ残されている。これは音楽家が異種間で積極的な活動をしたというよりは、民族横断的なレコード産業があったこと(メジャー会社は欧米の両方のマーケットを睨んで、複数の移民集団の出身国の音楽を扱い、マイナー会社も東欧・南欧・(旧)オスマンなど、隣接する地域をカヴァーした)、ギリシア人とユダヤ人が両者とも、録音や公演のさいパートの欠員が生じたとき、たがいに音楽家を融通しあっていたことなど、必要に迫られた場合があったことによる。

ただし(旧)オスマンの音楽にはモダールで変拍子の奏法もあり、新世界の音楽に食い込むのに不利な部分もあって、わずかな例外を除き移民共同体から抜けられなかった。東欧ユダヤ人の音楽が発掘も研究も盛んであるのにたいし、(旧)オスマンの音楽がさほど目立たないのは、文化資本を発展させる環境の有無によるところも大きい。後者のような「新移民」の音楽が基本的に、アメリカの移民共同体内にとどまり、「アメリカ音楽」にさほど統合されなかったことの経緯については、あらためて今後の研究課題としたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）

① 黒田晴之、(書評)堀邦維著『ユダヤ人と大衆文化』、ユダヤ・イスラエル研究(日本ユダヤ学会)、査読無、第 29 号、2015、103-107

② 黒田晴之、パウル・ツェラン「死のフーガ」再読のために、ある詩の成立と受容と言説をめぐる問い、ユダヤ・イスラエル研究(日本ユダヤ学会)、査読有、第 28 号、2014、35-46

③ 黒田晴之、イーデルゾーンの目指した「ユダヤ音楽」、「モダニティー」のなかのユダヤ音楽学誕生、立命館大学言語文化研究、査読無、第 25 巻 4 号、2014、47-60
http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/lcs/kiyou/pdf_25-4_alt/RitsIILCS_25.4pp.47-60KURODA.pdf

④ 黒田晴之、(書評)池田あいの著『カフカと〈民族〉音楽』、ドイツ文学(日本独文学会)、査読無、第 148 号、2014、314-318

⑤ 黒田晴之、(書評)藤田恭子著『「周縁」のドイツ語文学 ルーマニア領ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たち』、港(ナマール)(神戸・ユダヤ文化研究会)、査読無、第 19 号、2014、119-126

⑥ 黒田晴之、(エッセイ)「ホロコーストの音楽」を聴くという体験 ザルメン・ムロテック氏の来日に寄せて、みすず、査読無、no.620 (10 月号)、2013、28-35

⑦ 黒田晴之、特別講座より 民魂の音を聴く 東欧ユダヤの民族音楽〈クレズマー〉と現代世界(平井玄氏、大熊ワタル氏、伊東信宏氏と行なった企画の報告書)、港(ナマール)(神戸・ユダヤ文化研究会)、査読無、第 17 号、2012、3-6

⑧ 黒田晴之、北彰、翻訳 ドイツ・ファシストの侵略者による犯罪行為の立証と調査に関する国家非常委員会の報告 解題、港(ナマール)(神戸・ユダヤ文化研究会)、査読無、第 17 号、2012)、95-96

⑨ 黒田晴之、(書評)タミ・シェム＝トヴ著、母袋夏生訳『父さんの手紙はぜんぶ覚えた』、港(ナマール)(神戸・ユダヤ文化研究会)、査読無、第 17 号、2012、111-114

〔学会発表〕（計５件）

① 黒田晴之、『エレニの旅』の影で ギリシア音楽とユダヤ人たち、ユダヤ学会、2015 年 10 月 31 日、早稲田大学戸山キャンパス(東京都新宿区)

② KURODA, Haruyuki、Yiddish Culture in

Japan（招待講演）、KulturfestNYC (Symposium)、2015年6月16日、Jewish Heritage Museum（ニューヨーク）

③ 黒田晴之、ユダヤの音楽とは何か？（トークにゲストとして招待）、音楽夜噺、2015年5月23日、音倉(東京都世田谷区)

④ 黒田晴之、東欧・旧オスマン領の歌の変遷 ユダヤ人の歌を中心に考える(招待講演)、シャンソン研究会、2013年6月29日、関西学院大学梅田キャンパス(大阪市)

⑤ 黒田晴之、パウル・ツェラーン『死のフーガ』 あらたに発見された資料から読み直す、ユダヤ学会、2012年10月27日、早稲田大学戸山キャンパス(東京都新宿区)

〔図書〕（計2件）

① 黒田晴之 他、(共訳)レオ・ロステン『新イディッシュ語の喜び』、大阪教育図書、2013、370-410

② 黒田晴之 他、(共訳)スヴェン・ハヌシェク『エリアス・カネッティ 伝記』(上巻)、上智大学出版、2013、30-172

〔その他〕

ホームページ等

① 科研企画「あなたと音楽と記憶と You and the Music and the Memory」
ちんどんとクレズマー等を融合させるバンド、ジンタらムータのレクチャー・コンサートに、音楽セラピー研究者の狩谷美穂氏、音楽ライターの東琢磨氏、音楽民俗学者のJoshua D. Pilzer氏(トロント大学)の講演を接続させ、「あなたと音楽と記憶と」という一般市民向けのセッションを、本報告者の勤務校(松山大学)で設けた(参加者数は200人ほど)。
各報告者の報告内容は以下のとおり。
狩谷美穂「誘う音楽、誘われる人間 音楽療法の現場より」
黒田晴之「東欧ユダヤ人・ギリシア人の音楽をめぐる状況」
Joshua D. Pilzer「音楽の境界、社会の境界：ポストコロニアル韓国の生存者」
東 琢磨「(<ヒロシマ>をフィルターにして）音楽の凝りをもみほぐす」
http://www.cc.matsuyama-u.ac.jp/~kuroda/You_and_the_Music_and_the_Memory.pdf

② 「イーデルゾーンの目指した「ユダヤ音楽」 「モダニティーのなかのユダヤ音楽学誕生」(立命館言語文化研究25巻4号)
http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/lcs/kiyou/pdf_25-4/RitsIILCS_25.3pp.47-60KURODA.pdf

③ ザルメン・ムロテック初来日「「ホロコーストの音楽」そして今 友情と追悼の講演会・音楽会」
http://www.cc.matsuyama-u.ac.jp/~kuroda/Music_in_the_Holocaust.pdf

④ 科研企画 公開研究報告会「オスマン帝国から羽ばたいた音楽 キリスト教、イスラム、ユダヤの音楽を聴く」
当該地域の音楽の基礎的知識を蓄積するために、同志社大学から横山真紀(真姫)氏、東京外国語大学(アジア・アフリカ言語文化研究所)から吉村貴之氏を招き、2012年12月14日、松山大学にて、「オスマン帝国から羽ばたいた音楽 キリスト教、イスラム、ユダヤの音楽を聴く」という公開研究報告会を催して、情報および意見の交換を行なった。各報告者の報告内容は以下のとおり。
黒田晴之「オスマンからギリシャへ、ギリシャからアメリカへ」
横山真紀(真姫)「スペイン追放ユダヤ人の歌と音楽」
吉村貴之「ヨーロッパとアジアの出会いアルメニアの近代音楽」
http://www.matsuyama-u.ac.jp/file/open/1367549709_856787_1748_pdf1.pdf

６．研究組織

(1)研究代表者

黒田　晴之（KURODA, Haruyuki）
松山大学・経済学部・教授
研究者番号：８０３２０１０９